

中国における宗教 —— 一神教に焦点を当てて はじめに

一神教学際研究センター長 小原克博

2011年9月24日、同志社大学新町キャンパスにおいて、公開シンポジウム「中国における宗教——一神教に焦点を当てて」を開催した。そこで、徐新（中国・南京大学教授、ユダヤ学研究所所長）、王再興（中国・襄樊学院講師）、敏俊卿（中国回族学会副秘書長）の各氏を講師として招き、それぞれ、中国におけるユダヤ教・キリスト教・イスラームの歴史や現状について語ってもらった。以下の各論考は、その際の講演内容に基づいた内容となっている。

それぞれの論考は、強調点の違いはあるものの、中国における三つの一神教をめぐる歴史的経緯、現状、そして、中国社会および中国政府との関係について言及している。中国と一神教という組み合わせは、聞き慣れないかもしれない。しかし、以下の論考を読んでもいただければ、それぞれの一神教が中国社会に深く根を下ろしていることがわかるだろう。共産主義の国でありながら、いずれ中国は世界最大のキリスト教人口を擁する国になるだろうと言われるほどに、キリスト教が伸張している。ただし、それがどのくらいの人口であるのかについては議論が続いている（王氏論文参照）。イスラームは約1300年前に中国にやって来て、国土の広い範囲に回族を中心とした数千万人のムスリムが居住している。また、人口は限られているが、非常に古い歴史を持つユダヤ人の共同体が存在している。

このように歴史的に見れば、中国社会にとって一神教は決して異質な存在ではない。しかし、そのことは一神教が、現在、中国において安定した位置にあることを必ずしも意味しない。キリスト教とイスラームは中国における五つの公認宗教の中に含まれているが、いずれも中国政府との微妙な緊張関係を保っている。そのあたりの事情も、以下の論考から読み取ることができるだろう。

中国における信教の自由の問題は、アメリカをはじめとする国々から、しばしば批判されてきたが、まずは中国における政教関係の現実を理解することが必要だろう。中国では、仏教、道教、イスラーム、カトリック（天主教）、プロテスタント（基督教）の五つが公認宗教とされ（儒教は宗教と見なされていない）、一定の条件のもと、信教の自由が保障されている。いずれの宗教に対しても国家秩序への忠誠や愛国的態度が求められており、そのあたりの事情は、戦前の日本の政教関係に酷似しているとも言える。

いずれにせよ、東アジアにおいて平和を維持していくためには、中国との関係はきわめて重要であり、政治・経済的な関係に目を奪われるだけでなく、中国社会に内在する価値観を幅広く理解していく必要があるだろう。以下の論考は、そうした課題に対する貢献にもなっている。